

「我が人生思い残すことなし」(前編)

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ—— 神戸での大空襲の後、昭男だけを家に残し、母きみは昭男の弟妹達を連れ、広島の実家の里に疎開した。父はその時すでに失踪して行方が知れなかったが、ある日家で一人過ごす昭男の元へ突然訪ねて来た。父は昭男に奈良で一緒に畑をやろうと言い出す、昭男はきっぱりと断り、父はまたすぐに出て行った。間もなく広島に疎開先では、とてつもない惨劇が始まっていた。——

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp)

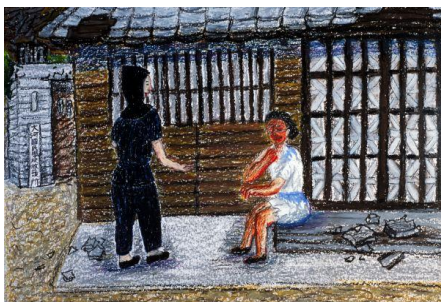
9. 恐怖

「大仕事や。街中が燃えとるぞ!」「えらい事になっとるけん。」きみたちが大急ぎで疎開先の実家に辿り着く頃、集落の者らが口々に騒いで外に集まっていた。

「子供らはどうじゃ?」タケに促されて、きみが家の中に飛び込んで行くと、高子を中心に皆身を寄せる様に囲炉裏の前に座っていた。「大丈夫やったか?」きみがほっとした表情で高子らに呼び掛けると、「うん、大丈夫。」「大丈夫。」と皆の声が帰って来た。「学校に行ってるけど、今日は『奉仕活動』ないって先生に言われて、すぐに帰って来てん。」「そしたら大きい地震があつてびっくりしてんけど、お姉ちゃんが『じっとしてたら大丈夫』言わはったさかい、じっとしててん。」一気にまくし立てたのは、次男の耕造だった。高子とは1歳違いの12歳、今年国民学校の7年生(今の中学1年生)。つまり昭男から3人は年子の兄弟と言う事になる。



「そうか……。良かったな。」きみは大きくなすきながら、改めて胸を撫で下ろした。「ところでお母ちゃん。広島どうなってしもたん?」「分からへん、今、^{あざ}字の会長さんが、役場へ聞いてくれたはるけど、全然つながらへんらしいわ。」「ここから見える街の方は、煙か雲で真っ暗で、何も分からへん。」



「タケさん。居るけ。」ふいに会長が家に飛び込んで来た。「どうじゃった?何ぞ分かったかのう。」タケが返事をする、と、「広島は全滅らしい。今、街中火の海になっとるけん。」「何があつたん?」きみが割って声を出した。「分からん。一瞬の事だったらしい。」会長がしぼり出す様な声で言った。「とにかくもう昼じゃ、食料が要る。薬も足らんじゃろ。」「救護要請のモールス信号が集会所に入ったそうじゃ。」「すまんが手空くもんは、支度出来次第街へ降りてもらえるかのう。」「分かりました。すぐに用意するさかい、どこへ行ったらええか言うて下さい。」きみが申し出た。「母さんは子供らの事があるさかい居とって下さい。私は他のもんへ声掛けて助けに行つて来ます。」「そうか。気、付けてな。」一様に不安の色が拭い切れないまま、きみ達は支度を整えた。

(つづく)